

部の歩み

都 留 重 人 先 生

都留重人先生には、昭和34年から昭和47年まで一橋大学陸上競技部部長を務めて頂きましたが、この間の部及びOB会に対するご貢献、部員及びOBに与えた影響は計り知れないものがあります。

都留先生がご発案頂いた「都留杯」、ご配慮頂いた「都留パーティ」、「軽井沢合宿」、「入部の栞」、毎年開催が待たれる「都留先生ご夫婦を囲む会」につき、取りまとめてみました。



都 留 重 人 学 長

(昭和49年卒業記念アルバムより)

無道人之短
無說己之長

都留重人

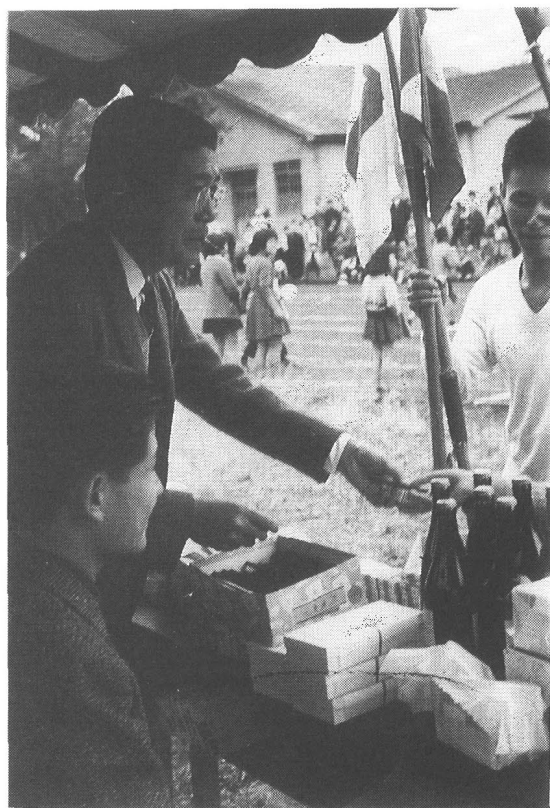
昭和42.3 卒業時記念アルバムの先生の揮毫

自然を
愛する心

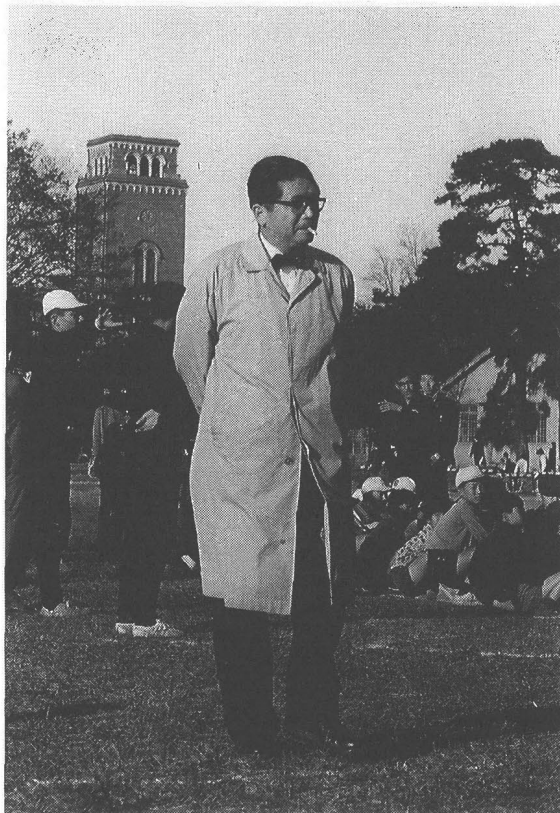
一九六九、二
都留重人

昭和44.3 卒業時記念アルバム of 先生の揮毫

『都留先生との思い出』



先生に陸上競技部長をお願いした直後の昭和34年11月3日前後に、
文化祭の行事として地元の子供達を招いて開催した運動会の一コマと思われます。
(後の国立選手権か)



『都留先生との思い出』



先生宅の年末パーティー 昭和41年12月3日

一橋陸上部70年史に寄せて

佃 義 範

(昭和35年卒)

同郷の中高通じての先輩松永さんにお誘いを受けて入部したものの、記録的にはお話にならないレベルであった。しかし、国立のグラウンドでは、リッカーミシンの全日本級の選手と合同(?)練習が出来、吉岡監督(暁の超特急)の指導を受ける依田選手(女子スプリンター)始め錚々たる選手団と一緒に走る事が出来たことは、素晴らしい思い出である。立川のグラウンド改修のため、国立グラウンドをお貸しした結果であった。競技生活の思い出では始めて箱根駅伝の予選会に本学初出場(練馬区役所前から石神井周回の10マイル-10名タイム)であろうか。

クラブハウスがあり、部長先生は歴代学長に就任される事が多く、先輩は一流企業のトップがおいでになると言う素晴らしい環境のなかにいたことを、卒業後何年も後になって改めて感じている。

都留先生が部長をお引き受け頂いたのは、昭和34年で、佐野キャプテン、と森田マネージャが、故吉見先輩のお計らいで、ご挨拶に出かけたことを覚えている。

都留先生と吉見先輩のご交誼は篤く、一例をあげれば、「現代」五種競技をお二人で、行われると言う話があり、我々OB也大いに成り行きを期待していたものである。400m走、円盤投げ、200m平泳ぎ、ゴルフ(オフィシャルハンディ)、と輪投げの五種目ということであった。結果に関しては、「試合のチャンスは度々あったのだが、お互いに満を持していたためか、競技は完遂ならず、ゴルフと輪投げをすまただけで終わってしまった。残念である。」(都留先生-吉見先輩への追悼文集より)と言う事であった。

クラブハウスの近藤おばさん、小滝、宇治原姉妹のおばさん方も忘れることが出来ない。要するにわが部は、競技部であると共にOBと一体となった米英大学に見るフラタニティ的な組織を先輩方が、意図的に築いてこられたように思うのである。

どうかこの素晴らしい特質が持続される事を切望すると共に、わたしも一員として微力を尽くしたいと思っている。

都留先生、ありがとうございます。

矢 島 一 孝

(昭和38年卒)

都留先生に部長になっていただいたのは、私たちの期が1年の時でしたから、ご就任直後の4年間、フルにお世話になったことになります。それだけに、私ども同期のものには、先生にお世話になった印象が特に強いものがあります。

毎年暮れの12月最初の土曜日、先生のご自宅での忘年会は大感激であったし、対抗試合では観戦を欠かされなかったこと、そして、どんな悪天候でも最後まで応援していただいたこと、また部員全員にユニフォームを新調してくださったことなど、私どもの時代のものであれば誰でも、感謝の気持ちをもって思い出すことができることであります。都留杯のこと、沖縄合宿のこと、軽井沢の別荘での合宿のことなどは、後輩の諸君の執筆に任せることにしましょう。

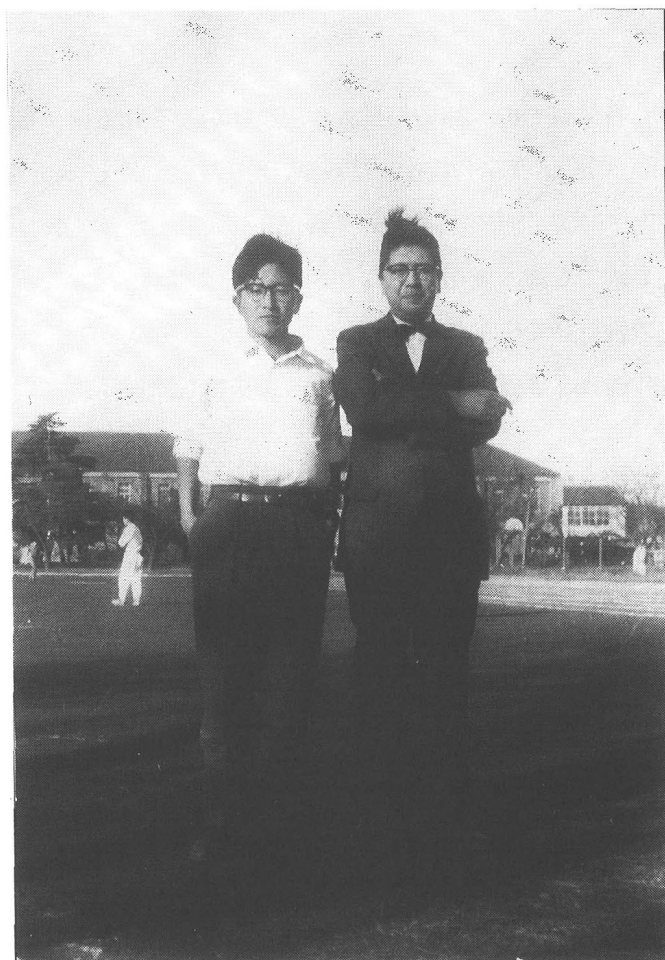
ここでは、会計を担当していた私としての思い出を、ふたつほど取り上げてみたいと思います。

ひとつは、陸上競技部の部費制度の改革のことです。昭和36年から37年にかけてのことですが、当時も学生はお金がなく、部費の運営には苦勞をしていました。そんなとき都留先生のアドバイスがあって、費目ごとに分析をしてみましたところ、部の活動を先輩がたに連絡する通信費をはじめ、いくつかの費目については、先輩がたに負担していただいていたのではないかというヒントをいただき、当然ながら先生のバックアップがあって、OB会費で負担していただくことになったのです。学生の負担がこれで軽くなったのと同時に、このとき、現在のOB会費の仕組みが出来上がったわけです。

もうひとつは、クラブハウスの増築費用のことです。多くの大先輩のかたがたに寄付をお願いしましたが、このときも都留先生がすべて根回しをしてくださいました。集金は渉外を担当していた松葉君と私の役割でした。これらのとき、先生のお宅にお邪魔し、奥様の手ずからの食事をご馳走になったり、先生が当時おられた経済研究所のお部屋に何度かお邪魔したことなども思い出されます。

陸上の記録面ではなにも残せなかった私ですが、会計の役を通じて少しは部のお役に立てたかと思っています。これらはすべて都留先生にお世話になった思い出ばかりです。

昭和36年頃の写真



「都留先生と私」

学習院戦のとき 学習院大学のグラウンドにて
私(矢島)の大切にしている一枚がありました。

部長杯新設さる

日本記録を破った者に対して、都留部長より部長杯が贈られる事になった。但し、この記録は、1925年(大正15年末)のものである。現在すでに、松本正義(法2)が63m94を旧三商大戦でマーク、当時の日本記録54m56を大巾に破っており、部長杯獲得第一号となった。棒高跳でも青木俊樹(経2)が3m70をクリアーし、3m80の記録に迫りつつある。先生の御言葉を借りれば「うれしさと共に不安の入り交じった心境にある」との事であるが、今後我々部員の志気を鼓舞する意味でも部長杯は大いに意義あるものとなった。

1925年末現在日本記録

100 m	11" 0	高 木 正 征
200 m	22" 2	谷 三三五
400 m	50" 2	納 戸 徳 重
800 m	2' 00" 6	納 戸 徳 重
1500 m	4' 07" 8	縄 田 尚 門
5000 m	15' 34" 8	永 谷 寿 一
110 m ハードル	16" 0	榎 原 如 一
400 m Relay	44" 2	
800 m Relay	1' 30" 0	
走 巾 跳	7 m 24	織 田 幹 雄
走 高 跳	1 m 85	平 岡 進
棒 高 跳	3 m 80	森 岡 佐喜生
H. S. J	14 m 80	織 田 幹 雄
砲丸投(16lbs)	12 m 88	溝 川 末 吉
円 盤 投	40 m 94	沖 田 芳 夫
槍 投	54 m 56	尾 崎 剛 毅

〈朝日「運動年鑑」昭和元年版より〉

(昭和38年度下半期～39年度上半期『部報』より掲載)

都 留 杯 規 定

都 留 杯 元陸上競技部長，名誉教授・都留重人元学長より記録優秀な現役部員に
対して授与される。下記規定記録に基づき，都留杯，準都留杯が授与さ
れる。

○ 男子部員（昭和61年7月1日改訂）

I 都 留 杯 ～年度毎に授与されるもの～

a 未だ破られていない大正末年の記録を破った者。

200 m	22" 0	L・J	7 m 24
-------	-------	-----	--------

但し，この記録が破られた時は，その種目は次年度から自動的に昭和10年末の
記録が適用される。

b 昭和10年末の記録を基準としている種目で，その記録を破った者。

100 m	10" 3	800 m	1' 54" 0
1500 m	3' 58" 0	110 m H	14" 6
400 m H	54" 0	H・J	2 m 01
H・T	50 m 28	J・T	68 m 59
4 × 100 m R	41" 5	4 × 200 m R	1' 28" 0
T・J	15 m 82	S・P	14 m 13
D・T	44 m 76		

但し，この記録が破られた時，その種目は，次年度より自動的に昭和16年末の
記録が適用される。

c 昭和16年末の記録を基準としている種目で，その記録を破った者。

400 m	47" 8	4 × 400 m R	3' 14" 6
5000 m	14' 30" 0	10000 m	30' 25" 0
P・V	4 m 35		

但し，この記録が破られても，当分の間このまま規定の改訂を行わない。

Ⅱ 準都留杯 ～卒業の際に授与されるもの～

a 学内新記録を出したもの。

(在学中のいずれかの年度内で、その前年度末までの学内記録を破った者。但し、同一種目で多数回にわたり記録を更新しても、1回とする。)

○ 女子部員 (平成元年3月3日改訂)

Ⅲ 都留杯 ～年度毎に授与されるもの～

100 m	12" 2	200 m	25" 3
400 m	57" 1	800 m	2' 08" 4
1500 m	4' 42" 6	3000 m	10' 28" 2
110 m H	14" 9	4 × 100 m R	49" 9
4 × 200 m R	1' 41" 8	4 × 400 m R	3' 57" 2
H・J	1 m 63	L・J	6 m 01
S・P	11 m 84	D・T	39 m 64
J・T	44 m 51		

Ⅳ 準都留杯 ～卒業の際に授与されるもの～

100 m	12" 8*	200 m	26" 5**
400 m	57" 42(学内記録)		
800 m	2' 08" 65(学内記録)		
1500 m	4' 35" 9(学内記録)	3000 m	10' 40" 0*
110 m H	15" 3*	4 × 100 m R	50" 5**
4 × 200 m R	1' 46" 0**	4 × 400 m R	4' 05" 0**
H・J	1 m 60*	L・J	5 m 40*
S・P	9 m 14(昭和5年 日本記録)		
D・T	34 m 18(昭和4年 日本記録)		
J・T	43 m 00*		

注 ※は、昭和63年関東I・C 標準記録

※※は、日本記録と学内記録を勘案した。

上記標準記録は当分の間据え置く。但し、上記を越える学内記録が出た場合は学内記録を標準記録とする。

“14分台”に大喜び

「橋大陸上部初の快挙？」

○「いいぞ、新記録だ」関東学生陸上部記録会Bクラス五千円の記録が発破されるとグラウンドの片すみで一人の選手を囲んで祝福の声があがった。肩をたたかれ首をちちめて遠藤恒夫君（一橋大）はいかにもうれしそう。だが、記録は14分55秒4と日本の二千円にもはかない

もの。しかし大正九年創部の一橋大陸上部にとっては五千円で15分をはじめて切った歴史的なできごとなのだ。

さらに同陸上部には部長の都留重人氏（経済学部教授）の制定した「都留部長杯」というのがあり、昭和十年の記録を破ったものが銀製のカップをもらえるという。

同陸上部のコーチでこの日応援にきた田島直人陸連国際局長も「遠藤君は大学にはいつてから陸上をはじめたが、練習熱心。きょうの記録もその苦勞が報われたんでしょう。都留部長にすばらしいカップを出すよう進言しましょう」と約束。片すみは再び歓声でいっぱいだった。（法大木月グラウンド）

昭和42年4月16日
報知新聞より

都留杯、都留杯(準)受賞者一覧

名誉会員都留重人先生より別に定める規定に基づき、都留杯、都留杯(準)が現役部員に授与される。

I 都留杯受賞者一覧 ～年度毎に授与されるもの～

氏 名	種 目	記 録	年月日	場 所
松 本 正 義	J・T	63m94	昭39. 7.12	神 戸 王 子
中 山 信 正	400mH	59" 8	40. 5. 2	駒場グランド
山 崎 隆一郎	400m R	44" 1	40. 6.11	駒 沢
水 野 晴 夫	400m R	44" 1	40. 6.11	駒 沢
藤 田 伸 夫	400m R	44" 1	40. 6.11	駒 沢
寺 田 征四郎	400m R	44" 1	40. 6.11	駒 沢
青 木 俊 樹	P・V	4m00	40. 6.11	駒 沢
遠 藤 恒 夫	5000m	15' 30" 4	40. 6.12	駒 沢
吉 村 研 一	800m	1' 59" 3	40. 6.27	学 芸 大
遠 藤 恒 夫	1500m	4' 07" 6	40. 9. 5	駒場グランド
遠 藤 恒 夫	800m	2' 00" 4	40.10.10	日 大
遠 藤 恒 夫	5000m	14' 55" 4	42. 4.16	法 大
塚 越 芳 男	400m R	43" 2	40.10.10	一 橋 国 立
相 川 晃 一	400m R	43" 2	40.10.10	一 橋 国 立
服 部 宏	400m R	43" 2	40.10.10	一 橋 国 立
浜 田 愼	400m R	43" 2	40.10.10	一 橋 国 立
川 幡 雅 宏	110m H	15" 5	52. 7.10	日本万国博記念競技場
陶 山 寿 一	100m	10" 6	52. 7.10	日本万国博記念競技場
陶 山 寿 一	400m	49" 8	52. 7.10	日本万国博記念競技場
陶 山 寿 一	800m R	1' 29" 3	53. 7. 9	世田谷総合グランド
川 幡 雅 宏	800m R	1' 29" 3	53. 7. 9	世田谷総合グランド
鈴 木 政 士	800m R	1' 29" 3	53. 7. 9	世田谷総合グランド
福 田 良 之	800m R	1' 29" 3	53. 7. 9	世田谷総合グランド

内 田 哲 也	T・J	14m86	57. 5.22	国立競技場
中 野 裕 子	800m	2' 31" 6	60. 6. 2	世田谷総合グラウンド
徳 永 浩 一	1600m R	3' 21" 50	62. 5.16	国立競技場
山 本 継	1600m R	3' 21" 50	62. 5.16	国立競技場
白 石 幸 成	1600m R	3' 21" 50	62. 5.16	国立競技場
岡 浩	1600m R	3' 21" 50	62. 5.16	国立競技場
徳 田 直 寛	1600m R	3' 24" 09	62.10.18	一橋国立
松 本 勝 男	S・P	13m09	63. 4.24	一橋国立
友 野 賀 世	J・T	34m06	63. 9.17	大井埠頭
野 村 倫 子	400m R	51" 49	63. 5.21	国立競技場
林 明 子	400m R	51" 49	63. 5.21	国立競技場
野 本 滋 子	400m R	51" 49	63. 5.21	国立競技場
長 島 葉 子	400m R	51" 49	63. 5.21	国立競技場
田 中 朝 子	400m R	51" 8	63.10.16	豊 田
野 村 倫 子	800m R	1' 48" 5	63. 7.10	神戸王子
長 島 葉 子	800m R	1' 48" 5	63. 7.10	神戸王子
林 明 子	800m R	1' 48" 5	63. 7.10	神戸王子
神 野 智世子	800m R	1' 48" 5	63. 7.10	神戸王子
野 本 滋 子	800m R	1' 53" 7	63. 4.24	一橋国立
岡 浩	1600m R	3' 15" 99	平元 5.21	国立競技場
設 楽 良 昌	1600m R	3' 15" 99	元 5.21	国立競技場
中 村 正 宏	1600m R	3' 15" 99	元 5.21	国立競技場
長谷川 聡	1600m R	3' 15" 99	元 5.21	国立競技場
長谷川 聡	400m	48" 57	元 5.20	国立競技場
松 本 勝 男	D・T	41m46	元 5.19	国立競技場
伊 丹 千 絵	400m	58" 9	2. 7. 8	大 井
伊 丹 千 絵	800m	2' 11" 34	3. 6. 2	国立競技場
伊 丹 千 絵	1500m	4' 35" 9	4. 7.11	東女体大
宗 像 秀 雄	P・V	4m40	6. 5.20	国立競技場

II 準都留杯受賞者一覧 ～卒業の際に授与されるもの～

氏 名	種 目	記 録	年月日	場 所
村 上 良 郎	J・T	55m34	昭42. 5.20	三井府中
浅 井 勝 美	S・P	11m69	42.10.22	一橋国立
池 田 隆 弘	400m R	43" 6	42.10.29	立 川
古明地 康 正	400m R	43" 6	42.10.29	立 川
服 部 宏	400m R	43" 6	42.10.29	立 川
浜 田 愼	400m R	43" 6	42.10.29	立 川
服 部 宏	800m R	1' 30" 8	43. 7. 7	大阪長居
中 島 茂	800m R	1' 30" 8	43. 7. 7	大阪長居
古明地 康 正	800m R	1' 30" 8	43. 7. 7	大阪長居
浜 田 愼	800m R	1' 30" 8	43. 7. 7	大阪長居
吉 村 研 一	1500m	4' 06" 0	43. 9. 8	駒場グラウンド
浜 田 愼	200m	22" 5	43.11. 2	八 王 子
鈴 木 仁	1500m	4' 05" 6	44. 7.13	一橋国立
鈴 木 仁	800m	1' 57" 5	44.10.10	一橋国立
遠 藤 恒 夫	3000S C	8' 54" 8	44.10.18	広島市営(特別杯)
藤 田 孝 一	S・P	12m50	45. 7.12	神 戸 王 子
藤 田 孝 一	H・T	36m18	45.10.18	駒場グラウンド
佐 藤 彰	H・T	36m64	46. 6.13	東京学芸大
金 氏 俊 郎	D・T	35m84	46.10.24	一橋国立
金 氏 俊 郎	H・T	38m60	46.11. 6	一橋国立
田 島 泰 次	L・J	6m80	47. 5.21	国立競技場
田 島 泰 次	T・J	14m73	47. 5.21	国立競技場
石 井 康 之	P・V	4m20	48. 5.19	立 川
佐々木 孝 雄	H・J	1m90	48. 7. 8	国立競技場
谷 口 優	H・J	1m95	49. 5.26	国立競技場
谷 口 優	110m H	15" 7	49. 7. 4	大阪長居
佐々木 俊 二	1500m	4' 02" 6	50. 5.17	国立競技場
一 場 正 守	P・V	3m90	50. 5.17	国立競技場
古 宮 博 幸 (旧姓 増田)	L・J	6m90	51. 5.21	国立競技場

寺 田 恭 典	400m R	43" 19	52. 5. 21	国立競技場
小 汀 昌 之	400m R	43" 19	52. 5. 21	国立競技場
塩 野 学	P・V	3m 81	52. 5. 1	一 橋 国 立
中 村 龍太郎	400m H	56" 6	52. 6. 5	駒 沢
秋 山 寿 彦	10000m	31' 41" 0	53. 10. 29	中大グランド
秋 山 寿 彦	5000m	15' 25" 0	53. 11. 5	瑞穂競技場
川 幡 雅 宏	L・J	7m 05	53. 5. 19	国立競技場
川 幡 雅 宏	400m R	42" 55	53. 5. 19	国立競技場
陶 山 寿 一	400m R	42" 55	53. 5. 19	国立競技場
陶 山 寿 一	1600m R	3' 28" 2	54. 5. 20	一 橋 国 立
石 山 哲 生	1600m R	3' 28" 2	54. 5. 20	一 橋 国 立
鈴 木 政 士	400m R	42" 55	53. 5. 19	国立競技場
西 康 宏	400m	49" 0	55. 7. 13	大 阪 長 居
西 康 宏	400m H	55" 6	55. 3. 23	大 井 埠 頭
西 康 宏	1600m R	3' 27" 4	56. 6. 7	世田谷総合グランド
田 辺 潔	1600m R	3' 27" 4	56. 6. 7	世田谷総合グランド
松 原 俊 二	5000m	14' 40" 4	56. 5. 24	国立競技場
山 下 誠 一	1500m	3' 58" 3	57. 7. 4	三 ッ 沢
中 山 信	S・P	12m 81	56. 5. 3	一 橋 国 立
中 山 信	D・T	36m 62	56. 5. 3	一 橋 国 立
深 沢 豊	D・T	36m 80	58. 6. 5	一 橋 国 立
深 沢 豊	S・P	12m 88	58. 5. 20	国立競技場
内 田 哲 也	L・J	7m 20	58. 9. 7	大 井 埠 頭
中 野 克 也	1600m R	3' 27" 4	56. 6. 7	世田谷総合グランド
寺 尾 普 一	1600m R	3' 26" 61	61. 10. 5	三 ッ 沢
日 渡 淳	1600m R	3' 26" 61	61. 10. 5	三 ッ 沢
徳 田 直 寛	400m H	54" 82	63. 5. 21	大 井 埠 頭
野 村 倫 子	100m H	16" 9	63. 10. 22	東 女 体 大
野 本 滋 子	800m	2' 20" 9	平元 6. 25	江 戸 川
安 田 啓 明	1600m R	3' 21" 1	元 9. 10	世田谷総合グランド
林 明 子	400m	59" 66	2. 4. 30	国立競技場
林 明 子	800m	2' 19" 62	2. 5. 12	等 ヲ 力

長谷川 聡	400 <i>m</i>	48" 12	3. 5.17	国立競技場
伊 丹 千 絵	400 <i>m</i>	57" 42	3. 5.17	関東 I・C 国立競技場
伊 丹 千 絵	800 <i>m</i>	2' 08" 65	4. 5.24	関東 I・C 国立競技場
土 田 克 則	110 <i>m</i> H	15" 3	4. 7.18	三 商 大 枚 方
吉 田 賢 一	H・T	46 <i>m</i> 02	5. 5.23	関東 I・C 国立競技場
伊 坪 道 広	20km W	1° 39' 27"	8. 1. 1	元旦 競 歩 神 宮 外 苑
富 沢 和歌子	S・P	9 <i>m</i> 24	9. 4.27	記 録 会 日体大健志台

「都留先生ご夫妻を囲む会」事始め

内 藤 藤 三

(昭和38年卒)

昭和34年に一橋大学陸上競技部の部長になられた都留先生が、赤坂のご自宅に学生を招待してくれたのは、昭和34年12月3日(土)が第一回目であり、その後このご招待は毎年の慣例となった。

先生は昭和47年に一橋大学長に就任されたため、部長は細谷先生に交代されたが、この間の都留先生の現役学生に対する極めて熱心な物心両面に亘るご支援は、お世話になったOBにとっては終生忘れられない貴重な思い出であり、教訓でもあった。

一方、陸上競技倶楽部の事務局は、現在は佃先輩が居られる憐ツクダに置かせていただいているが、昭和48年から56年迄は銀座3丁目に事務所があった。即ち、西銀座のフードセンターの前の建築会館の7階に石膏鉦山会があり、同会の事務局の解散に当たってそのスペースを吉見先輩のお世話で倶楽部の事務所として使用できるようになった。

事務所費用捻出のため有限会社いちりく社を設立し、主として首都高速道路の回数券の販売をしたり、又、倶楽部サロンとして夕方週2～3回OBが集まれるように改装をしたりもした。

当時、この事務所に集まっていたOBの間から、都留先生に感謝の気持ちを伝えられないものかとの話題が自然発生的にもち上がり、吉見先輩とも相談した結果、佐野先輩他数人の有志が発起人となり、「都留先生ご夫妻を囲む会」を開催することに話が決まった。具体的検討を行う段階ではサッポロビールの辰野先輩のお世話になり、場所は銀座のリオンドールとし、第一回目の先生ご自宅へのご招待日の17年後の同日に当たる昭和51年12月3日(金)に、約60名のOBが参加して盛大に行われた。

そして、翌年も同じ12月3日に三笠会館で古高先輩他が発起人となり行われ、その後若干の紆余曲折はあったがほぼ毎年この会が開催されるようになり、今日に至っている次第である。

軽井沢合宿の思い出

吉 田 良 造

(昭和42年卒)

都留先生のご好意により、昭和40年8月15日から6日間長距離を中心とする軽井沢合宿が追分にある先生の別荘で行われました。何せ30有余年も経過しているため、記憶も定かではなく、先日柳行李を開け、何か資料がないか探してみましたら、当時の私の「練習記録」があり、その中に「軽井沢合宿」の項がありましたので、その抄録を紹介します。

第一日 丹羽先輩、日月主将、後藤の4人で急行「第一信州」で中軽井沢駅に到着。先生がわざわざお迎えに来られ甚だ恐縮の至り。先生宅へタクシーで向かい、途中細井さん父君の車と合流。「油屋」に投宿中の山崎やオートバイで参上の堀も加わる。昼食は奥様のおもてなしで、感激。その後、先生ご夫妻は帰京され、我々だけの生活を開始。我々を一番困らせたのは、洋風トイレ。とにかく右往左往、どちらを向いて座ってよいのやら。

第二日 朝5時半練習開始。岩村田方面へ。往路は下り一方。つまり復路は上がり一方。40分の所で折り返す。ここで、細井さん人家を見つけ、朝6時というのに便所を拝借。

第三日 朝から浅間登山。全員元気よく砂岩の多い山肌をよじ登るも、着いた所は、浅間山頂ではなく前掛山。正規ルートに戻り、浅間山頂へ。小休止後下山。途中、日月さん蛇を捕まえて細井さんを脅かす。勢い余って、付近の女性を脅かし、ブドウを強要する。小浅間を経て峰ノ平に到着。ここから丹羽先輩、細井さん、織田、遠藤中軽まで10キロロード。我々はバスで下る。途中ロード組に会う。意外や意外、細井さんダントツのトップ、しかし、期待に違わず予想どおりゴールはダントツで丹羽先輩、遠藤に引き離される。

最終日 旧軽の吉見先輩宅で全員歓待を受け、先輩宅で一泊。

翌日、軽井沢でトラックをヒッチハイク、安中におられた山口先輩宅を訪ね、歓待を受ける。翌朝上野駅に到着。遠藤らと飯を食うが、全くの金欠でライスにソースをかけて腹に駆け込む。まさに軽井沢と上野とでは天国と地獄。

とにかくにも、この一週間は思い出の多い合宿でありました。

『軽井沢合宿の思い出』（昭和40年8月）



霞む浅間を背景に

美 和	織 田	細 井	後 藤	遠 藤
山 崎	吉 田 輝	堀	日 月	

浅 間 山 頂 で



織 田	美 和	後 藤	日 月	細 井	丹 羽	吉 田 輝	堀	遠 藤
--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------------	---	--------

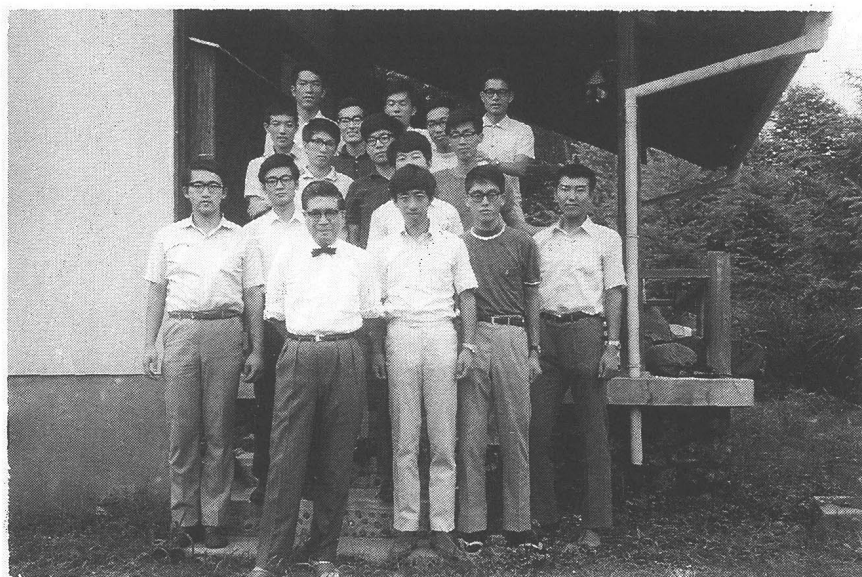
昭和41年8月の合宿



遠藤	美和	堀	柿沼	梅原	秋間	吉田輝	後藤	鈴川
	青木		先生		奥様	織田	池田	高橋



都留先生の軽井沢別荘 昭和41年8月



軽井沢合宿 昭和44年8月

先生の別荘から旧軽の吉見さんの別荘まで走って行って、吉見さんの奥様から美味しそうなスイカを出されたのに、藤沢さんだったか幾石さんだったか、恰好つけて、練習中ですから、とか言って固辞したのをウラメシク思ったことをよく憶えています。

昭和48年卒 建部克史

新入部員勧誘パンフレット

梅 原 肇

(昭和43年卒)

今年の正月実家に帰り、たまたま古い書類を整理していたところ昭和42年度新入部員勧誘パンフの原稿が出てきました。このパンフは前年より都留先生の全面的バックアップにより作成されることとなり部員獲得に大いに効果を発揮し、その後の部の発展に寄与したと思われます。この年は田島直人コーチの推奨の言葉を戴くことができ更に効果があがったと記憶しています。田島直人先生の心温まる推奨の言葉を転載させて戴きます。なお私事に亘り恐縮ですが、長距離選手であった私が余技で走り幅跳で5m67をとんだ時、田島コーチから良くまとまっていたとお褒めの言葉を頂いたことが当時の写真を見ると懐かしく思い出されます。

「陸上競技のすすめ」

一橋大学陸上競技部コーチ 田 島 直 人

走り、とび、投げるという動きは人間の運動の中でも一番原始的なもので、未経験者でも簡単に始められます。インターカレッジで活躍している本学の陸上選手たちも入学当初は諸君と同じようにスパイクシューズをはいたこともないものが大部分でした。それが一年か二年たつと見違えるほどたくましくなるのです。昨年は官学の雄東大と大接戦の末これを破りました。

陸上部長都留重人先生は若いとき旧制八高で中長距離に活躍した名選手であります。走る喜びを知ったので本の虫にならないですんだと述懐しています。日本経済学界の重鎮として幅広く活動しておられるあのねばり強さは陸上競技によってつちかわれたのだと思います。

私は昨年の秋からときどき国立にきて若い選手と一緒に走ったりとんだりしています。武蔵野の松や、けやきに囲まれた400のトラックはいつきても快い黒土の匂いがします。

諸君！ためらわずに陸上部にお入りなさい。陸上部に入って後悔した先輩は一人もいません。国立の4年生の生活から陸上部の生活をとったら何が残ったであろうかといつも部生活を懐かしんでいるものばかりです。一橋陸上部は日本に於けるアマチュアスポーツのメッカです。

一橋大 陸上競技部 のしおり

1966年4月



祝入学

部長 都留 重人

新入生諸君、入学おめでとう。

入学試験という難関を突破するための勉強に追われて、諸君の多くは、スポーツを楽しむ暇も持ちえなかつたのではないかと思います。

めでたく一橋大学への入学を遂げられたこのさい、新鮮な空気と広い学園にめぐまれた小平、国立のキャンパスで、諸君は何か健康的な部活動をやつてみたいと考えておられることでしょう。この「しおり」は、本学の陸上競技部のことを諸君に紹介するためのものです。

1965年7月11日

陸上競技の楽しみは、未経験者がいつからでも始めることができ、一方で体力を養いながら、同時に自分の記録を客観的に向上できるという点にあります。そしてわが部の方針は、入部当時の記録がどうであろうと、全員で楽しく体力の習練をしようとするものです。

心おきなく国立のグラウンドにお出下さい。私や青木主将他部員一同がいつでも御相談にのります。

部の紹介

歓迎

一橋大陸上競技部は大きな抱負のもとに新入生諸君を歓迎します。

それは、わが部は今や大きな渦を巻きつつ発展する過程にあり、部員一同が一丸となって、一つの目標に向っているからです。その目標とは、対抗試合に全勝し、また箱根駅伝に出場することにほかなりません。この目標達成のために新入生諸君に一役かってほしいのです。多数の諸君が国立の400メートルグラウンドを訪れることを念願しています。

部長

わが部の部長は1959年以来都留重人先生です。先生はかつて学生時代に陸上競技をされたので、深い御理解をもって部の世話をして下さいます。ご多忙のなかをさいて試合には必らず顔を出して熱心に応援されますし、練習にも会議の合間をぬって出てこれ、コンパにも気軽に出席されて、楽しみも悲しみも共にしつつあたたい忠告を親身になってして下さいます。

部員

現部員は 4年生 9名、3年生 6名、2年生 17名で、合計32名ですが、このうち高校時代陸上競技の経験者は5名だけで、ずぶの素人であった部員が立派に活躍しています。参考までに、現部員の出身高校を申しますと——
立川・洲本・九段 北園・岩国・芝商・曉星・藤島・両国・水戸一高・芝高・小田原・武蔵ヶ丘・長崎東・神戸・戸山・観音寺第一・湘南・伊勢・今治北・唐津東・東海・上野

練習

毎日（ただし日曜は除く）3時30分～5時30分（土曜日は2時から）
国立グラウンドにて。（裏面地図参照）

原則として週3回は出ること。

わが部はあくまで学業優先のたてまえをとっていますので、講義にさしつかえるような練習はやりません。勉学とスポーツを両立できるよう合理的な計画を組んで科学的に練習をやっています。したがって今までスポーツをやっていなかった人でも自己の能力に応じた練習が可能ですので、徐々に人一倍屈強な体格と精神力をものにすることができます。たとえ最初は記録が低くても、自分なりにそれを伸ばそうとする努力のうちに陸上競技の真髄が見出だされるのですし、それが人間修養の本諦でもあると思われます。諸君、その底に流れる貴重なものをいっしょに掴まえてみようではありませんか。

費用

部費は毎月100円。入部金はありません。金のかからないスポーツですから、ひと汗かく用意さえあれば、いつからでも練習できます。

種目

裏面に主な種目と現部員3傑記録とをのせておきましたが、このほかにもハンマー投などいくつかの種目があります。特に長距離選手にとっては、多くの駅伝があります。詳しいことはグラウンドにきて部員に遠慮なく聞いて下さい。

部 の 特 徴

合宿所をもっている

わが部は通称「クラブ・ハウス」と呼んでいる合宿所をもっています。その住所は国立町中区175、電話は0425—72—4281で、裏面の地図に示されているとおり、グランドから歩いて5分のところにあります。これは部の先輩の努力によって建てられたもので、ふだんは部員の下宿として用い、食事代（実費）だけで現在10名の部員が入居しています。（まだ2～3名の入居は可能です。）合宿練習するときは、このクラブ・ハウスを利用しますから、一人一週間2000円位の経費で出来ます。合宿所と名が付くと、冷い上下関係を想像されるかと思いますが、わが一橋大学陸上競技クラブ・ハウスは極めて温い家庭的雰囲気になみちあふれた合宿所です。

先輩とのつながりが親密である

40余年の歴史を有するわが部は、200名をこえる会員をもつOB会を組織しており、このOB会が毎年現役部員を招待して総会を開くならわしになっています。そして部活動経費の大半はOB会の寄付でまかなっており、先輩とのつながりが親密であるというのがわが部の特徴の一つになっています。

なお、わが部OBの中には、陸上競技団体の役員として活躍されている方も少なくなく、たとえば次の著名人がその中に数えられます。

水上 達三（昭3）	三井物産社長	日本陸上競技連盟副会長 日本学生陸上競技連盟副会長
相馬 勝夫（昭5）	専修大学学長	関東陸上競技連盟顧問
村木 武夫（昭6）	住友石炭副社長	東京陸上競技協会会長
尾本 信平（昭8）	三井金属副社長	日本陸上競技連盟財務局長
吉見 泰二（昭11）	昭和鉱業社長	日本陸上競技連盟財務局次長

部長杯の制度がある

これは1964年度から制定されたもので、日本記録（ただし、大正末の日本記録です）を更新した部員には、都留部長から銀杯が贈呈されることになっています。昨年度は部長杯獲得者が続出し、400mRを含む6種目で10個の部長杯（一人で3個を獲得した部員があり、これは大型の銀杯1個を得た）が実現しました。部の水準がこのような上がったので、今年度は都留部長が新構想を出されるとのことです。

どうです、諸君も挑戦してみませんか。

よいこの広場があります

これは、わが部員の自発的産物であり、伝統あるもので、心と心の温い交換所であります。一冊の帳面に各自が楽しいこと、うれしいこと、悲しいこと、悩むこと、憤ることを、書きたい時に思うまま作文し、それに対する部員全体の友情にみちた批判忠告を受け、それによって裸の人間に目覚める広場であります。

1965 年度 戦 績

- 5 月: ▷対 東京外語大戦 …… 44-25で勝つ。
6 月: ▷インタカレッヂ …… 得点18点で第7位。
 ▷国公立戦 …… 得点52点で教育大、東大に次ぎ第3位。
7 月: ▷三商大戦 (わが部のメイン・イベント) …… 大阪長居競技場で行なわれ
 一橋大54点 神戸32点 大阪30点で四連覇。
10月: ▷対 東大戦 …… 今年こそは、と東大に対したが、予想外 (以上?) の惨敗。20-49であった。
 ▷対 学習院大戦 …… 38-31で勝つ。
11月: ▷十大学戦 …… 第8位
 ▷箱根駅伝予選 …… 一年ごとに伸びてはいるが、出場権を得るには、なお一層の努力が必要。

1966年度試合予定

- 5 月: ▷対 東京外語大戦 (国立本校)
 ▷インタカレッヂ (国立競技場)
6 月: ▷国公立戦 (場所未定)
7 月: ▷三商大戦 (国立本校)
10月: ▷対 東大戦 (駒場グラウンド)
 ▷対 学習院大戦 (場所未定)
11月: ▷箱根駅伝予選 (場所未定)

部員一同の抱負

春のインタカレッヂでは、一昨年在り得点5点で第11位、昨年在り得点18点で第7位でしたが、今年こそは東大を抜いて上位進出をねらうこと、7月の三商大戦では、今年がホーム・グラウンドであることも活かし、史上初めての五連勝を達成すること、そして10月の東大戦では、永年の宿願を果して勝利をかちとること、以上のうち少なくとも二つは実現させたいものと考えています。現部員は、そのためにも新入生諸君のほとばしる情熱とファイトに期待するところ大であります。

このように目標を定めて試合に勝つことも大切ですが、部員一同の抱負の重要な一面は、やはり、一橋大学の一運動部として、技能の優劣を問わず、各自がその潜在的にもつ可能性をフルに発揮するべく努力する精進の過程に重点をおき、誰にとっても学生時代の楽しい思い出となるような立派な人格形成のクラブ活動を築きあげてゆくことです。

日本記録と一橋大学記録との比較

	学内記録	大正末	昭和20年
100m			10" 3
200m			21" 6
400m			49" 0
800m			1' 54" 0
1500m			3' 56" 8
5000m			14' 30" 0
10000m			30' 25" 0
110m H			14" 6
400m H			54" 2
400m R			41" 4
800m R			1' 28" 0
1600m R			3' 16" 8
L・J			7m 98
H・S・J			16m 00
H・J			2m 02
P・V			4m 35
J・T			68m 59
D・T			46m 19
S・P			14m 19

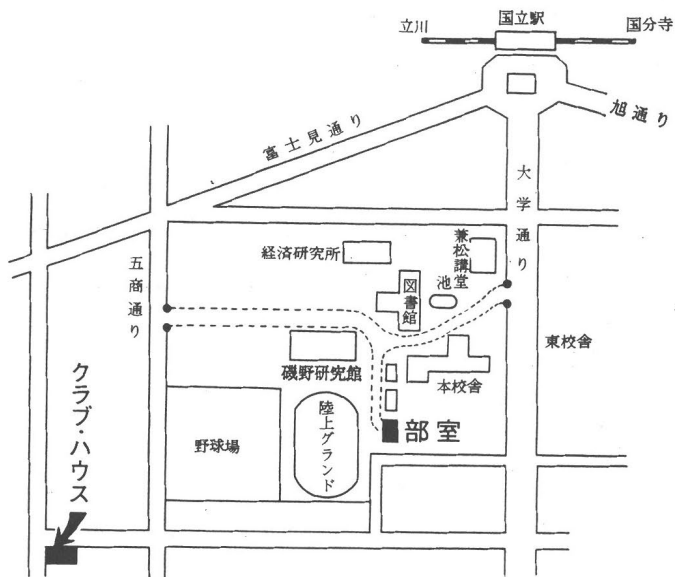
この図はちょっと見たところ、何が何だか分りにくいかもしれませんが、しかし、しばらく眺めていると、これはなかなか興味深い図なのです。

まず、これがどういう目的の図であるかといえますと、一橋大学の昔から現在にいたるベスト記録が、戦前の日本記録にくらべ、どのような相対的位置にあるかを、各種目ごとに示したもののなのです。

第一に目盛のことをいいますと、最初にもかく図のまんなか大正末の日本記録をとり、右端に昭和二十年の日本記録をとることにきめました。したがって、その間に日本記録が進歩したその進歩分の数値が、秒であれ、分であれ、メートルであれ、すべての種目について同じ距離で示されています。たとえば一〇〇メートルは一〇秒八から一〇秒三に進歩しましたから、この二つの縦の線のあいだの距離は〇秒五に相当しますが、走高跳ですと、一メートル八八から二メートル〇二に進歩しましたから、その同じ距離は一四センチメートルに相当します。このように、種目ごとに目盛の単位はちがっていますが、相対的には、この二つの縦の線のあいだの距離が、大正末から昭和二十年にいたる日本記録の進歩の幅をすべての種目につき同じ長さのものと示したことになります。

さて、まんなかのあたりで右へ左へと大きく動いている線が一橋大学記録です。ごらんのとおり、大正末の記録より右へ出ているのがいくつかあり、中でも、槍投と八〇メートルと棒高跳と五〇〇メートルが一ばん右の方へ突出していて、もうすこしで、右の昭和二十年の線から左へでこぼこに出ている線に触れそうになっています。このでこぼこの線は昭和十年の日本記録の線です。（昭和十年の日本記録が昭和二十年になっても破られなかった種目は、昭和二十年の縦の線と一致しています。）今あげた四つの種目の学内記録はいずれも現部員のこしらえたものですが、同時に、砲丸投や円盤投の面では、本学の記録は相対的に非常に劣っていることに気付かれると思います。

今年は、この一橋大学記録の線がどこまで右へ動くか、またどの程度でこぼこをなおすか、楽しみにしています。



現在部員の上位3傑記録

	1	2	3		1	2	3
100 m	11'2	11'3	11'4	走 高 跳	1m65	1m55	1m50
200 m	23'0	24'0	24'3	走 巾 跳	6m02	5m88	
400 m	51'5	52'1	52'3	三 段 跳	11m63		
800 m	1'57'5	2'00'4	2'05'2	棒 高 跳	4m03	3m00	
1500 m	4'07'2	4'16'3	4'21'3	砲 丸 投	11m20		
5000 m	15'23'8	16'41'3	16'45'6	円 盤 投	31m79	27m65	
10000 m	33'13'0	34'58'0	35'09'0	槍 投	63m94	50m34	46m63
110 mH	16'6	16'9		400mR	44'1	1600mR	3'28'6
400 mH	58'4			800mR	1'32'2		

細谷千博先生

細 谷 千 博 先 生

細谷千博先生には、昭和47年から昭和58年まで一橋大学陸上競技部部長を務めて頂きましたが、この間都留先生同様に部に対して多大なご貢献を頂きました。

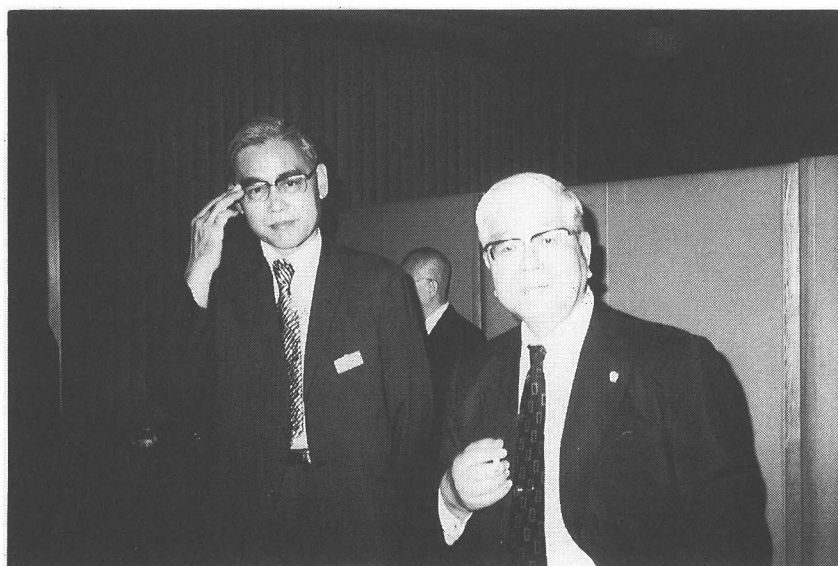
細谷先生にご薫陶を受けたOBに、「細谷先生を囲む会」、細谷先生の思い出をまとめてもらいました。



先生を囲む会でのご挨拶
平成11年1月21日如水会館



昭和52年秋，国立グランドにて先生を囲んで



昭和55年7月，尾本副会長の叙勲お祝い会にて，同副会長と



平成11年1月21日如水会館での先生を囲む会で、
右から先生、内藤幹事長、水野副幹事長

細谷先生の思い出

寺田恭典

(昭和53年卒)

『身の丈、186cm日本の国立大学の中で一番背の高い学者である。(当時)』とは細谷先生ご自身の自己PRである。私が一橋大学陸上競技部に入部した昭和49年には先生は既に陸上競技部の部長を勤めていらっしゃいました。初めてお会いした時の印象は、長身で肩巾も広く、白髪まじりでいかにも学者らしい方との印象を持ちました。

また、若い頃何かのスポーツに打ち込まれ、頑健な身体を作り上げ、今日に至っていらっしゃるとの印象も持ちました。後日、ご本人の弁で、一高から東大へ進まれて水泳部(水球?)で活躍されたお話を聞き、なるほど間違いなかったと確信した次第です。

先生には講義やゼミの忙しい合い間を縫い、よく、グラウンドに足を運んでいただき、我々学生の練習風景をご覧になられていらっしゃいました。我々も、細谷先生の姿をグラウンドでお見かけするにつけ、和気合い合いのうちにも緊張感を味わいながら練習に打ち込んだものでした。試合が近づくと、選手一人一人の調子を聞いて下さり、また、相手校の戦力分析についても色々とアドバイスをしていただきました。特に三商大戦や東大戦の前には、我々学生以上に、試合に対しての意気込みを感じたものでした。

細谷先生は、ご自身部長在任11年間(昭和47年～58年)で『残念なのは、ただの一度も三商大戦と東大戦に勝てなかったことである。』と色々な場面でお話しされたことがあり、物静かな性格とは裏腹にこのふたつの対抗試合の勝負にかける情熱の程を伺わせるエピソードとなっております。また、この言葉を聞くと、我々、細谷先生にお世話になった者としては、非常に申し訳なく、また改めて勝負に勝てなかった口惜しさが湧いてきて、20年以上も前のことが思い出されてきます。

楽しかった追い出しコンパでの「かっぱ踊り」のご披露や、ラテン語の歌など、数々の先生の出しものに学生諸氏も、さぞや圧倒されたことでしょう。今、思えば、アッと言う間の4年間でしたが、陸上競技を通じて良き師、良き友の人間性に触れ、過ごせたことに感謝しています。細谷先生の今後ますますのご活躍を祈念いたしております。

幻の三商大戦優勝

— 細谷先生への糠喜びプレゼントの顛末 —

中 村 龍 太 郎

(昭和54年卒)

平成11年1月21日、如水会館に於いて第3回目の「細谷先生を囲む会」が開催された。席上、細谷先生は「昭和48年から58年の部長在任11年間で、多くの対抗戦があったが、東大戦と三商大戦は一度も優勝したことがなかった。ただ、一度だけ優勝したと思ったことはあったが、……。」と語られた。この、細谷先生が唯一優勝したと思ったことのある試合こそが、私が主将であった昭和53年7月9日世田谷グランドで行われた三商大戦である。この三商大戦は、1位と2位共に総合得点91点で同点のため1位種目数の差で神戸大の優勝、我が一橋大が2位となった。実は、この時、「細谷先生が優勝したと思った」状況があった訳だが、この「幻の三商大戦優勝」の顛末を語ることとする。

この年は、冬季練習・沖縄合宿と三商大戦優勝を最大の目標として取り組んできた。そして、7月9日世田谷グランドは、天候・グランドコンディションとも最高の状態であった。我が一橋は、選手の持てる力を発揮すれば必ず優勝できると確信しての参戦であり、実際に各選手が80～120%の力を発揮した。一方、神戸大も戦前の予想以上に強く、途中の得点経過は、やや押され気味に試合が進んだ。

試合も終盤に差し掛かり、残す種目は槍投げと800Rのみとなった。槍投げの4投目頃(神戸大の選手は非常に強く1位・2位は確定の状況。3位に大須賀がつけているが、福田が大阪市大の選手に負けており5位の位置にいる。)、それまでの得点集計からみて、「一橋が3位・4位を確保すれば、最後の800Rで一橋が勝ち、神戸が3位になれば、同点優勝だ。」という情報が回ってきた。この情報に、福田が発奮。残り2投で大阪市大の選手に78cm差をつけ4位に入った。この結果、我が一橋勢は、いやが上にも大いに盛り上がり、「800Rで一橋が勝って、神戸が3位になれば、同点で一橋の優勝だ。」という情報がグランド内に走り回ったのである。

そして迎えた800R。鈴木・福田・川幡・陶山のオーダーで他の二校を全く寄せ付けず、1' 29" 3という学内新大幅更新というおまけつきで1位となり、神戸大が3位となっ

た。この時、リレーのメンバーはもちろん、一橋の部員や関係者が細谷先生の回りに集まり、久々の三商大戦優勝に「万歳・万歳」を連呼したのである。

しかしながら、優勝を信じ切っている一橋に対し、神戸大から「同点の場合は、1位数の多い方が優勝ではないか」との申し入れがあり、一橋側からは「同点の場合はリレー勝者が優勝ではないか」と主張した。審判結果は、対抗戦の特別ルールが規定されていないため、学連規定により同点の場合は1位数の多い方が優勝という事で、1位数4 (100 m・5000 m・110H・4×200R) の一橋に対し、1位数7 (1500 m・LJ・HJ・PV・SP・DT・JT) の神戸大が優勝という結果になった。

細谷先生が11年間の部長在任中、ただ1度だけ三商大に勝ったと思ったことがあった顛末は、以上である。ところで、「同点の場合はリレー勝者が優勝」という情報の出所は、定かではないが、私は、副将川幡であると信じて疑わないのである。

「細谷先生を囲む会」について

西 康 宏
(昭和57年卒)

細谷先生には、昭和47年から昭和58年の退官までの11年余に渡り、一橋陸上競技部の部長として大変お世話になりました。私の陸上競技部在籍は、部長をお勤め頂いた時期の後半にあたりますが、戦績に係らず、グラウンドに足を運んで頂き、選手各人にあたたい言葉をかけて頂いたことを記憶しております。また、宴会にも度々参加頂き、追い出しコンパ(だと思いますが)で現役部員の無粋な芸に呆れて、一高水泳部伝統の由緒正しき「河童踊り」をご披露されたりと現役顔負けの活躍をされておられました。

学生時代に水泳部に所属された細谷先生が、陸上競技部の部長に就任されたのは、ご本人の弁によれば、米国のプリンストン高等研究所に赴任されていた昭和47年に、当時の部長で大学の同僚でもあった都留重人先生(4月に学長就任のため部長を退任)から直筆の手紙にて部長就任要請を受けられたからとお聞きしております。この要請をご快諾頂いた後、帰国直後の9月の東大戦を観戦頂いた経緯は、アスレティック・フロイントの「私と陸上競技」(後掲)に書かれております。尚、ご記憶によれば、同書面には細谷先生のかねてからの知人でもある水上達三先輩(昭和3年卒)も細谷先生の部長就任に大いに乗り気であるとの趣旨があったそうです。

細谷先生の業績をたたえるべく、不定期ではありますが、以下のような形で「細谷先生を囲む会」を開催しております。

- 第1回 「退官を記念して」

日 時：昭和58年3月1日 場 所：如水会館 参加者：15名
幹 事：入山(昭和51年卒)、佐々木(同左)

- 第2回 「毎日出版文化賞受賞を記念して」

日 時：昭和60年1月17日 場 所：ぼたん(すき焼き)
幹 事：川幡(昭和54年卒)、中村(同左)

- 第3回 「学士院会員を記念して」

日 時：平成4年9月1日 場 所：如水会館 参加者：34名

幹 事：福田(昭和54年卒), 中村, 西

- 第4回 日 時：平成11年1月21日 場 所：如水会館 参加者：22名

幹 事：寺田(昭和53年卒), 中村, 西

尚, 蛇足ですが, 小職は卒業後の留学先である国際大学で細谷先生(副学長)に再び薫陶を受けることになり, さらに仲人もお願いした関係で第3回以降は万年幹事を務めております。細谷先生からのご要望もあり, 今後は2年に1回程度の頻度で開催させて頂ければと考えております。

私 と 陸 上 競 技

細 谷 千 博

今回陸上競技部の部長ということになったが、陸上競技にかけては私はズブの素人である。もっとも一般論としては、大学の運動部の部長というのは過去のスポーツ経験とは無関係に選ばれるようである。スポーツ経験ということになると、大学教授には無縁の人が多いようであるから、早速人選難に陥ってしまうのであろう。

9月15日、東大戦の観戦に部長として駒場のクランドに初出動をした。ここはかつてクラス対抗のリレーの選手として走ったり、一高、三高戦で太鼓を打鳴らしながら応援したこともあるゆかりの地でもあるが、東大側の石川(吉右衛門)部長と久しぶりに出合わせた。早速石川らしい毒舌が飛んできた。来る場所を間違えたのではないかと。たしかに彼は一高時代レッキとした陸上競技部員(もっとも途中でやめたが)であり、私の方はグラウンドのすぐ横にあるプールで連日泳いでいた水泳部員であった。専門家らしく彼は一橋の誰は強く、記録はどうかのと仲々事情に精通しており、素人で新米の私の方は名前も記録もたと承知せず、それからは陸に上った河童よろしく、雨中で健斗する選手諸君をただ眺めている始末であった。

生来スポーツ好きの私であったが、小学校時代マラソンで、約100人中77位になって以来、どうも陸上競技は苦手の部類に属していた。ただ中学の最上級生のとき、東京の6マイル競歩大会というのに出場してたしか3等になった覚えがある。もっとも競歩というのはどういう訳か、日本人には今でも人気のない種目で、当時も専門家は殆んどいなかったから、この大会も素人競技同然だった。しかしとも角スポーツ欄の片隅とはいえ自分の名前が新聞に出たのはこのときが初めてでその点では忘れ難い出来事であった。翌朝中学に行くとお前の名前を新聞で見たぞと早速寄ってきたのも石川であった。

(「ATHLETIK FREUND 1972」より収録)

歴代コ一チ

織 田 幹 雄 先 生

水上会長，尾本幹事長，吉見副幹事長を始めとする先輩の方々のご配慮により，織田先生が国立にお出で下さったのは，昭和40年の日月主将の時であった。陸上界の神様と称された方が，わざわざ国立までお出で下さり，全種目にわたり懇切丁寧にご指導頂き，部員一同感激，感謝の極みであった。翌年田島先生にバトン・タッチされるまで，何回となく国立にお出で頂いた。

先生は平成10年12月2日93才で逝去なされたが，日本陸上界は言うに及ばず，我が一橋大学陸上競技部に残された影響も計り知れないものがある。

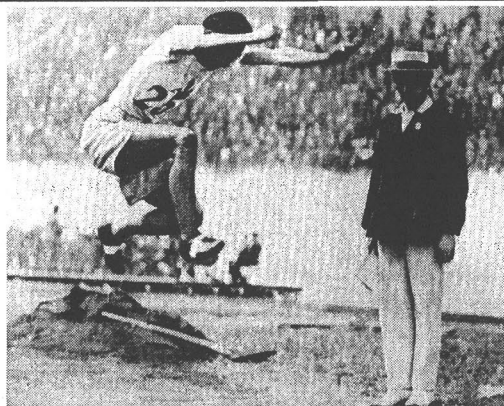


国立グラウンドで，青木（昭和42年卒）を指導
される織田先生 昭和40年6月18日

織田幹雄氏死去

93 歲

日本初の五輪金、三段跳び



十五分、動脈のゆるい破裂のため神奈川県鎌倉市の湘南鎌倉総合病院で死去した。九十三歳だった。自宅は神奈川県藤沢市鶴沼海岸、二ノ一七〇一〇九。告別式の取りなどは未定。喪主は長男 正雄（まさお）氏。

（関連記事スポーツ面に）
パリ・アムステルダム、ロサンゼルスと三大会連続で五輪に出場。日本チームの主将を務めた一九二八年アムステルダム大会の三段跳び決勝で15.21を跳び、優勝した。

三十一、朝日新聞社に入社し、同年15日58の世界記録をマーク。再度主将として臨んだ三年ロサンゼルス大会では、直前の国際大

盟や国際陸連の要職を歴任。日本陸連名誉会長も務めていた。八八年、文化功労者。著書に「跳躍一路」「オリンピック物語」などがある。

まさに「陸上の神様」

青木半治・日本陸連会長の話 本当に何と書いていいかわからない。悲しい気持ちでいっぱいだ。今年春

くすべての新技に精通しておられ、まさに「陸上の神様」だった。シドニー五輪を控えた陸上界にとって大変な損失だ。

指導受け世界記録
小掛昭二・メルボルン五輪三段跳び日本代表（日本陸連副会長）の話 同郷の広島出身で早大入学時から今日まで指導いただいた。おかげで現役時代は世

頑
張
り
た
い。

「努力は報われる」貫く

評伝 織田幹雄さんは
アマチュアとして
道を究めた人だった。「歴
史上の人物」となっても、
まじめで紳士という姿勢は
まじで

一九二八年、アムステルダ
ム五輪の三段跳びで優勝、
日本の金メダル第一号にな
った織田幹雄氏

全く変わらなかった。日本陸上界のシンボルだったのが、選手としても指導者としても、自ら名声や栄誉などを求めず、周りから推されて自然とオリンピック関連や陸連の要職におさまった。

織田さんは陸上を純粹に考えていた。「努力すれば報われる」という姿勢を貫

いて研究や練習に打ち込み、競技人として非の打ちどころがなかった。

金メダルを取ったアムステルダム五輪の三段跳び決勝は、ちょうど人見絹枝さんが銀メダルを獲得した女子八百斤決勝と重なった。ゴールした後に選手全員が倒れるという激しいレース展開を、決勝を控えた織田

を待つ間、我々がたむろしているフィールドの中に運んで休ませた」と話した。チームリーダーとして責任感も人一倍強かった。

自らの決勝では世界記録を狙ったが、三回目足を痛め、予選の二回目で記録した15分21で優勝。表彰式での君が代は「千代に八千代に」から始まった。「ま

た。東京・代々木の国立競技場の国旗などを掲揚するポールの高さは151.21。この数字が織田さんが跳んだ金メダル記録にちなんだものであることが、その功績の大きさを物語っている。

【論説顧問 今泉恒之介】

界記録も出すことができた。アジア大会を一周間後に控えた先月下旬、自宅を訪ねた際にはお元氣そうで、「がんばれよ」と声を掛けられた。偉大な先輩を亡くし、残念でならない。遺志を引き継いで、立派な金メダリストをつくるよう頑張りたい。

H 10.12.3
(日経)

織田幹雄氏 死去

「功績引き継ぐ」 アマ関係者悼む

お元気でいてほしかったが……。陸上界を見ても、これから二十一世紀に向けての後輩の活躍をご覧になったかと思う。偉大な先輩のごめい福をお祈りしたい。

サンティパーブ・アジア大会組織委員会事務次長の話 偉大な選手であり、アジアの五輪運動に多大な貢献をした。日本で最初の五輪金メダリストというだけでなく、アジアの若い世代に模範を示した。彼の功績に報いるためにも組織委員会は今大会の成功と、アジアの五輪運動の発展のために全力を尽くす。(共同)

河野洋平・日本陸連副会長の話 日本が世界に誇る名ジャンパーで、伝説的な人だった。早大の新生生だった時に春の合宿の指導のお願いに勤務先まで訪ねたのが、最初にお目にかかった時。競技場にもしよっちゅう姿を見せられ、スタンドで後輩をつかまえては熱心に練習の仕方やコンディショニング調整の方法を教えられていました。

バンコク・アジア大会の開幕を目前に控えた二日、日本のスポーツ界に初めて五輪の金メダルをもたらした陸上界の偉人、織田氏が亡くなった。現役を退いた後も日本のアマチュアスポーツ界の発展、普及に貢献。「織田さんに続け」と頑張ったスポーツ関係者はその死を悼んだ。(社会面参照)

八木祐四郎・日本オリンピック委員会(JOC)専務理事の話 長い間、スポーツ界の大先輩としてご指導いただいた。いつまでも

田島直人先生

丸山吉五郎先生

田島直人先生の思い出

水 野 晴 夫

(昭和42年卒)

田島先生が国立にコーチとして来校されたのは、我々が4年生の時であった。織田幹雄先生が多忙なので、その後任として来られたのだが、先輩達のご配慮であまりにも超一流の先生方が来て下さるので、我々は緊張気味であった。田島先生は週一回鎌倉から来て下さり、練習の最後までグラウンドにいて、熱心に指導して下さい。基本に忠実に、繰り返して体に覚え込ませることと、リラックスすることを教えて頂いた。当時は浅草橋から通っていたので、先生と帰りはいつも一緒した。電車に乗る前には必ず駅前の「ふるさと」に立ち寄り、ビールをご馳走になり昔話を伺うのが楽しみであった。その中で先生が言われた「一橋の陸上部には旧制高校の良さが残っており、純粹で気持ちがいい」との言葉を今でも鮮明に覚えている。卒業後もいろいろとお世話になった。就職後2年目の年に会社で陸上部を創設し、その秋に伝統ある「三井陸友倶楽部」(田島先生が創始者)に加盟できたのも先生のお力添えのお陰であった。在学中からのお約束(?)により、仲人までして頂いた。また、よく鎌倉のご自宅までお邪魔して、家内共々食事をご馳走になった。ある時、奥の部屋からシューズをもって来られ、私に下さった。それは先生が東京オリンピックの時に総監督として使用されたもので、「TAJIMA」と自署されてあった。今でも大切にしており、春秋のオール三井の大会に履いている。

先生は平成2年12月4日78才で逝去なされたが、鎌倉の教会でのお別れ会で、学連顧問でもあり三井陸友倶楽部の顧問でもある柏倉さん(三井鉱山OB)にお会いして、先生が仲人をされたのは3組だけで、最初は自分で最後は水野君だとのお話しをその時初めて伺った。現在三井陸友倶楽部の副幹事長を務めさせて頂いておるが、三井陸友倶楽部を大事にしていかなければと思う次第です。



昭和41年10月16日OB戦，都留先生ご夫婦，
田島先生を囲んで，国立グランド



田島先生に指導を受ける短距離陣
昭和41年10月16日国立グランドにて

— 123 —

五輪三段跳び
金メダリスト



田島直人さん死去

なグラウンドの暑気に決勝の試技を待つうちに毛布に包まれていた田島さんは、ウトウトと眠りかかった。競技開始のアナウンスに目を覚ました直後の一回目に、なんとそれまでの世界記録を塗り替える16秒の世界新をマーク、優勝を収めたのだ。

京大時代、ベルリン行きを備え、ドイツ語を猛勉強。ゲートを好み、「若きウェルテルの悩み」を暗記するほどで、遠征ではチームの通訳としても重宝がられた。後に、日本オリンピック委員会（JOC）の委員になり、数少ない国際派としてアジア大会やユニバーシアードの選手団長を務めた。

イスラエル、台湾の不参加をめぐって、日本選手団の引き揚げなどで揺れ動いた一九六二年のジャカルタ・アジア大会では、陸上監督としてアジアの仲間意識を尊重すべきだ、と国際陸連のペナルティも恐れずに出場の決断を下した。三井鉱山勤務時代の労働争議にも冷静沈着な判断で解決にあた

一九八八年アムステルダム五輪の田島幹雄氏、三年のロス五輪の南部忠平氏に続き、三六

故田島君の青春を懐かしむ

五輪への夢・奥さんとの出会い…

織田 幹雄

実は、田島君の兄さんとの付き合いの方が早かった。中学で、岩国の寮に行ったことがあった。田島君は小学生だった

が、「自分もオリンピックを狙うんだ」と、そのころからいつていたらしい。競技には、面白

い縁があるものと感ずる。一九三三年、五輪で彼が走り幅跳びの代表に選ばれ、選手村で同室となって初めて話をするようになった。毎朝、夜明け

になると「今度は何は跳ぶんだ」と、大声の真言で開口したことがある。しかしこの時はあまり成績が良くなかった。そこで「次のベルリン大会を狙うなら、三段跳びに変えた方がいい。ほくは君と同じ九歳（二四年パリ五輪）で優勝は六

位だった。二十三歳（二八年アムステルダム五輪）で優勝し

た。君も次は勝て」と励ましたものだ。その通りになったが、彼はまだ若くて、女子選手

の写真ばかり撮りまわっている。その冷やかしたことがある。あの時知り合った玄の短距離選手が今の奥さんだ。田島君は帰国後、彼女に会いたくて京大に進んだんです。

ベルリン大会の時、私は大阪朝日に勤務していて、田島君に手紙を書いた。確か、優勝したアムステルダム五輪の経験で、「試合ですべて日本と同じようにする。いつもと違ったことをしちめいかん」というような下

書きだった。試合の後、明日に国際電話があり、いきなり「おめでとうございました」というんだ。試合の朝、手紙が書いてあったら気楽に試合が出来たといっていた。

その後はそう機会がなかったが、田島君のいいところは、自分で考えて三段跳びをや

った。君も次は勝て」と励ましたものだ。その通りになったが、彼はまだ若くて、女子選手

の写真ばかり撮りまわっている。その冷やかしたことがある。あの時知り合った玄の短距離選手が今の奥さんだ。田島君は帰国後、彼女に会いたくて京大に進んだんです。

戦後、彼はアジア大会や五六年メルボルン五輪の監督を務めた。日本体育協会や日本陸上競技連盟の仕事をしたが、ちょっとまじめすぎるところがあった。会費などで思い切ったことをとらないうので、みんなに煙たがられるところがあった。四日目の新聞には、親しかった奥野君（日本水泳連盟元会長）の訃報（ふほう）が載っていた。同世代の仲間が次になくなって本当に寂しい思いだ。（談）

朝日新聞社社友、
日本陸上競技連盟名誉会長

国　　立（くにたち）

コーチ　田　島　直　人

広い地球の一角に楕円形を画いて、その廻りをぐるぐる走っている。引力の法則にさからって、重い鉄のたまをほうり上げては落としている。バーナード・ショウや夏目漱石がみたら何というであろう。

7つ8つのころのかけっこから始まって頭の毛の半分以上も白くなったきょうの日まで、よくもまあ、あきずに走ったりとんだりを続けて来たものだと思う。東京オリンピックが終ったときはさすがにつかれて、もうこういう毎日から一切縁を切ろうと考えたのだが、しばらくたつとまたいつの間にか昔の生活にかえていた。業のようなものである。前世は馬か鹿だったのかも知れない。

いくら早く走っても馬にはかなわない。南部忠平さんはバネの化身のような人だったが、かもしかの半分も飛びはしなかった。動物にも劣る能力をひけらかして、やれ世界記録だとか何とかいって騒いでいる。この忙しい世の中に御苦労な用なしどもがいたものである。

何のためにお前たちはそんなことをくり返しているのだと不思議がる人が多い。だが、一体人間は何のためと考えなければ何をしてはならないのだろうか。山があるから登るのだという言葉の意味は深い。

武蔵野の松や、けやきの木立ちの中に400 mのトラックがある。私はその黒土にスパイクのあとをつけたことが2、3度ある。ずっと昔のことである。そのトラックにまたときどきやってくるようになった。そしてそこに立派な部長を中心に50人の若者の美しい集まりがあることを知った。1週間に一度のつもりでいても何かの用事で半月もこれないこともある。そんなときは何となくものたりないようなさびしさを感じる。鎌倉から通うと2時間はタツプリかかる。しかし、その道はちっとも苦にならない。何かの用事で近くまでくると、ついでに国立までと切符を買う。そして2時間の後、満ちたりた気持ちで国立の駅を離れる。

100 mを10秒台で走れる選手は1人もいない。巾跳びも6 m にながしかで、まず中学校並みである。それなのにそれらの選手たちの1人1人が立派に見える。なぜだろう。

長い間忘れていたものを私はみたのだ。旧制高校そのままの姿である。昔の高校では入学式が終わると、体のよさそうなのを各部から引張合って部員にする。生まれて始めてスパイクをはいて、10 m 走ってころんだのもいる。そんなのを三年間に何とかものにしなければならぬ。技の未熟さを意気で走るのだと弁解した。だが、みんなひたむきであった。それと同じ姿が国立にあった。私は40年の昔にかえたような気がした。

Mというスプリンターは身体は小さい。だがよくきたえた四肢をしている。ある日彼と同じ電車で帰った。彼は空いている座席に腰をおろさなかった。足腰を強くするためだという。東京にたくさんある大学の選手にそういう心掛けの者が何人いるであろうか。こうしてかち得た11秒2の記録はヘイズの10秒フラットより尊い。

Aはキャプテンで、棒高とハードルが得意である。陸上競技の中で一番面白い種目を2つ選んだネ、といったら、誰もやる者がいないからやったのだという。そして日本一流選手にまけない技術を身につけた。りっぱである。4 m 40 の記録に脱帽する。

織田、南部時代の早稲田の部長は山本忠興先生であった。電気工学の泰斗であったが、忙しい研究の合い間によくグラウンドにこられた。

都留先生も多忙である。だが、よくグラウンドに出られる。この部長にじっとみられているとき、選手たちはどんな気持ちになるだろう。日本一の部長を持つ誇りに若人たちの胸は明るくはずんでいるに違いない。私は40年の経験を残らずここではきだしてみようと思っている。オリンピック選手が出るかどうかはわからない。そんなことはどうでもよい。今、日本にわずかしが残っていない純粋なアマチャア・スポーツの土壌を大事に育てたいのである。

(「ATHLETIK FREUND 1966」より収録)

先輩諸君国立に行う

コーチ 田 島 直 人

今年も亦、ほとんどグラウンドに顔を出すことができなかった。グラウンドに出ないコーチなどというものはおよそ意味がない。今年限りでコーチという名を解いていただきたいと思っている。

6年前、わたしがはじめて国立のグラウンドに行ったころは、棒高の青木主将を中心にヤリの松本、スプリントの水野、中長距離の遠藤、新人吉村らがいて、部の空気が充実していたときであった。東大にはじめて勝ったのもあの年である。昭和41年の秋、駒場のトラック、最後の800リレーで勝負がきまることになった。都留さんが勝てるでしょうかという。100と400の結果からみて勝てなかったらおかしいと答えたが、内心不安であった。

第一走者松本がよく走った。彼一世一代の好走であったろう。吉村、浜田と差を開き、アンカー水野は東大の強敵青木を近づけなかった。テープを切った水野は東京オリンピックのヘイズもどきにバトンを空高く投げた。押え切れぬ喜悦の表現であった。

翌年7月、豪雨の日の三商大戦、灘のトラックはあっという間に海となった。あのコースも見えないような走路で400に51秒4が出た(藤田)。強かったと思う。

あところは一週に1回くらいは国立に行く時間があつた。ここ2、3年は1ヶ月に一度も危いようになった。JOCの中の私の仕事がふえたのである。

そこで1つの提案がある。東京にいる先輩が毎週土曜、1日だけでよい、交代で国立のグラウンドに行ってもらえないだろうか。君たち自身現役部員にあつたとき、先輩がちょっと顔を出してくれるだけでどんなにうれしかったか、心強かったか覚えているであろう。都合のつかないときは誰かほかの人に代ってもらう。1シーズン1回か2回で役目は果たせる。わたしもその中の1人に入れてもらう。是非誰かがスポンサーになってスケジュールを作してほしい。

(「ATHLETIK FREUND 1972」より収録)

身近なことから

名誉会員 田 島 直 人

京都の光華大学は南部敦子、岡本貴美子など日本陸上界を飾る名選手を生んだ名門校であるが、当時そこのコーチをしていた小池良一氏が、

「どうも最近の選手は脚の故障が多い。そして一度痛めるとなおりがおそい。昔も肉離れがあったがもう少し早くなおった。小さい時から歩く習慣がなくなったためではないだろうか」

と私にいったことがある。小さいときから自然に徐々に行なわれる脚の訓練期間がないことが脚の故障に関係があるように私にも思われる。

織田幹雄氏は広島で、南部忠平氏は北海道の山野を走り廻って両親を心配ばかりさせていたという。私も小さいときから石垣をとび下りたり、小川を飛び越す遊びが好きであった。

先般西ドイツの4人の女子選手がやってきた。ミュンヘンで大活躍したスプリント走巾跳のローゼンダールらである。私は一夕彼女らの体験談をきいた。3つのときプールに投げこまれた。それから10年間、体操、バスケット、ハンドボールと何でもやらされた。結局陸上に一番素質が向いていることを知って陸上の選手になった、というようなことを同じように語ってくれた。

幼稚園、小学、中学とバスや電車で通学する日本の都会の子供の中からは野性のある選手は生まれないのではあるまいか。ヨーロッパではバス通学の場合も1つか2つ停留場を早く降りて歩かせる親もある。日本では交通の危険ということもありなかなか難しい。

私は何年か前の本誌で水野晴夫君が電車に乗ったとき座らないで立っていることを書いた。エレベータを使わないで階段を歩くことは今日からでもやれる。グラウンドだけがトレーニングの場ではない。道を歩くときも膝を伸ばし腰を入れよう。手近かなところにいくらでも努力の道がある。大学4年間の競技生活のためだけではない。一生の健康のためにも考え直してみようではないか。

(「ATHLETIK FREUND 1973」より収録)

丸山コーチの思い出



丸山 吉五郎先生

関 田 彰

(昭和52年卒)

丸山コーチが国立のグラウンドに初めて来られたのは、確か私が2年生の時の昭和49年の秋のころであろうか。丸山コーチについては、テレビの陸上競技中継の解説などで存じ上げていたものの、まさか直接指導していただけるとは夢にも思わなかったので、正直いって大変驚いた。

国立へは何度も足を運んでいたはずである。その中で教えていただいた、今でも覚えている練習方法がある。秋の名大戦が終わり、国立市の陸上選手権を過ぎると、いわゆる冬練に入る。従来は単純な走り込みと筋力トレーニング中心の内容だったが、丸山コーチが我々に課したのはインターバル走だった。ジョギングとゆっくりとしたウィンドスプリントを繰り返すいわゆるテンポダウアーと呼ばれているものである。今までのインターバル走は、歩行とウィンドスプリントの組み合わせであった。しかもコーチが要求したのは、確か最低でもトラック20周以上の距離だった。この練習はやってみるとなかなか厳しく、短距離系の私はとてもそれだけの距離をこなせなかったと記憶している。しかしシンプルな練習ではあったものの、その効果はもとより、終了後の充実感が病みつきになるトレーニングだった。それからというものの、我々の時代には丸山流インターバル走が冬季練習のスタンダードなメニューとなった。

丸山コーチは、グラウンドへご自身が指導されている選手を連れてくることもあった。ハイレベルにある選手と一緒に練習できたのは、お手本と刺激という意味でもとても有意義だった。しかし何と言っても日本陸上競技界の指導者である丸山コーチに指導していただけたことそのものが、平凡な一選手であった私にとって望外の喜びであった。今、あらためてその機会を与えてくれた諸先輩方に感謝しなければいけないと思う次第である。

丸山吉五郎先生：関東学生陸上競技連盟会長，法政大学名誉教授，「陸上競技教室」

(1971年，大修館書店)，「陸上競技入門」(1970年，講談社)等の多数の著書を執筆されている。

クラブハウスの思い出

クラブハウスの思い出

昭和20年8月の終戦以後、朝鮮動乱が終わった昭和26年頃から漸く本格的に生活物資が出回るようになってきたが、昭和28～29年頃は依然として苦しい生活が続いていた。こうした時期に、地方出身学生の新入部員獲得を容易にすると同時に、部員の経済負担を軽くし、起居を共にしながらグラウンドでの陸上競技を含めて人格形成に役立てるため、クラブハウス建設構想がスタートした。

昭和28年の倶楽部総会で、建設費は会員の寄付金により捻出することを決定したが、寄付金を集めてからの建設着手では時間がかかり過ぎるので、水上先輩の個人保証によりクラブハウス建設資金を日本相互銀行（現在のさくら銀行）より借入れ、建設が始まった。クラブハウス建設は、吉見先輩が中心となり、山本省吾先輩が実務担当として大学キャンパス周辺の土地物件の調査を担当した。建設は吉見先輩が取締役経理部長をしていた昭和鉱業株式会社の独身寮を譲り受けて移築することで決着した。同時に、昭和鉱業の独身寮の炊事担当であった近藤節さんが住込みで学生の世話役をかねることになった。

こうして、地方出身の一橋陸上競技部員は、昭和29年7月からクラブハウスに入居する運びとなった。そして、諸般の事情でクラブハウスが廃止された昭和47年11月までの18年間にわたり、一橋陸上競技部員にとって陸上競技生活のみならず学生生活の数々のドラマを生み出し、多くの思い出を作り出したのであった。ここに、クラブハウスの住人であった方に当時の思い出を投稿頂き掲載するとともに、クラブハウス廃止年度のアスレティックフロイントに掲載された思い出を転記する。また、今回の70年史編集にあたって実施したアンケートの中からクラブハウスに関する思い出について寄せられた声も記載する。（クラブハウス建設の経緯については、「一橋大学陸上競技部史－大正12年～昭和33年－」の55頁から58頁を参照ください）

一橋大学陸上競技部運営相談会(於如水館)

日時 昭和 29 年 6 月 8 日 (火) 5 p.m. ~ 7 p.m.

出席者 吉見泰二 山本省吾
滝 泰之 坂本孝吉

協議事項

練習について

1. 東大戦 (6 月 20 日) に備えて強化練習 6/9^(*) ~ 16^(水)
2. 三大学戦にけ参加する。参加選手は練習及び記録等を総合判断し決定する。(三大学戦 7 月 25 日の予定)
3. 三大学戦に備えて強化合宿 (於クラブハウス)
7/12 (月) ~ 18 (日)
4. 秋の練習について
 - a. 秋の練習を大に実施し定期戦を行う。東大戦 外大戦 東経大戦等 積極的に申込むこと。
 - b. クロスカントリの対策を考えること。
5. 練習日誌をつけること。
6. 次年度キャプテンは三大学戦終了と同時に発表し 9 月 1 日よりの練習は新キャプテンにより行うこと。正式交代は学生間の協議によること。
7. 部員の増加に努めること。

クラブハウスに関する件

1. ハウス完成予定日 6 月 30 日
2. 落成式 7 月 3 日 (土) 学生対 OB 戦 詳細は別途連絡
3. クラブ運営委員会を設置し運営方法を協議しクラブへ提出すること (6 月 25 日まで)
4. クラブハウス寄附金徴収は近日中に開始する。

(部室に保存されている歴代ファイルより収録)

クラブハウスの思い出

竹 田 英 俊

(昭和32年卒)

さる11月5日、クラブハウスのサヨナラコンパに参加した。昭和29年から18年間の永きに亘り、我々クラブの団結の象徴であり、我々一橋アスリートの心の故郷であったハウスがなくなったのである。18年前の思い出を綴る時、一挙にいろいろな青春がいきいきとしてよみがえって来る感じである。昭和29年といえば、漸く戦後も終り、底浅い日本経済は、その後の大発展の為の基礎作りがなされていた時代であった。

大学2年生といえば、一橋寮での楽しくも新鮮な1年間を経て、2年生2名、1年生2名の一室4名の生活が始ったばかりであった。今も親交を続ける友人とペアを組み、新入生との同室生活は楽しく、ダベリングに読書に、日々、新しき自我の確立に没頭していた時だけに、クラブハウスへの転居に、必ずしも抵抗を感じなかった訳ではなかった。だが例をみない先輩各位のご厚情を考える時、単なる運動部の合宿所ではなく、寮生活にも劣らぬ人間形成の場としてのクラブハウスを築きあげようと決意して、勇躍、小平から国立へとリヤカーを引っ張ったのであった。同室の友3人が開いてくれた送別の小宴も忘れ難き思い出である。東京都北多摩郡国立町中区175のハウスは、滝、坂本、福島 of 3先輩と同期のNに私の5人であった。当時は、庭の前には家もなく広々としたものであった。近藤節女史(?)を加えた6名のハウスは、和やかな中にも、一橋陸上競技部大発展の礎を築くという使命感と、充実した学生生活への強い欲求をもってスタートしたのであった。

当時の部員が12名位であったから、夏の合宿も、全員がハウスに泊った。我々ゲルピン学生は、一橋寮の1日3食120円の貧しい食生活から、近藤のオバさんが作ってくれるカロリー倍増の豊かさへと成長を遂げさせて貰った当然の帰結として、国立グラウンドでの練習も、質量ともに充実したのであった。水島・奥村・松永・角が入居したのは30年であった。部員も20名をこえた。ハウスは完全に部の中心となった。他の運動部の学生からは羨望の的となった。オバさんには、皆よく叱られた。オバさんは、よく立川迄映画を見に行った。当時は、まだテレビがなかった。売防法もなかった。自動車公害もなかった。都内からの電車は一時間もかかった。

我々は走った。我々は歩いた。駅から20分の道程を歩く時、そこには、すがすがしい青春があった。育英資金が出た夜は、特に楽しかった。ときたま、駅とは反対の方向に初代住人は散歩した。そこには300円の青春もあった。(ワカリマスカ!!)

今、私は国立に住んでいる。2年前から住んでいる。13年ぶりの国立であった。余りの変容に驚いた。国立町は国立市である。団地がある。大学の門にはサクが出来た。坪5000円の土地が30万円である。エピキュールがなくなった。タクシーが多い。国電も速くなった。東京駅迄一時間かからない。ゴルフの練習場は、日曜日は4時間も待たされる。皆が豊かになったのであろうか。ベッドタウンの国立は、それでも、都内より遙かにきれいな空気をもっている。11月3日、兼松講堂で、「都市問題への挑戦」というシンポジウムがあった。都留学長は、土地問題を特に、都市問題の焦点として取り上げられたが全く同感である。今、クラブハウスは、土地問題の焦点として売却された。時代は変っている。大きく激しく変革している。我々のクラブも、時代に即応した変革へ、更に一步を進めた事になろう。変革は大胆に受け入れ、明日に向って成長しなければならない。

然し、私には、今小さな心配が宿っている。例えば、来年の一橋祭には、クラブの集いはあるのだろうか。毎年、如水会館の総会だけになるのだろうか。いや、そうではあるまい。国立のグラウンドに育ち、国立のグラウンドを愛する我々アスリートは、あのグラウンドの松の木の下に集って、ビールをくみ交し、肩をくんで、青空の下、部歌を高吟したいものである。やがて、別の形で、伝統ある我がクラブとして、最もふさわしい交流の場が生み出されるであろう。クラブハウスよ、ありがとう。ハウスは、私に2つの100mの記録を与えてくれた。ダラシない後輩どもは未だ、破ってくれない。卒業した年に作った北海道記録(10秒6)も未だ破られていない。

昭和29年の秋のある日のクラブハウス。

- 滝さんの巻 「タキさぁーん、マルさんからお電話ですよー」

それから5分後、先輩は、晴天の昼下り、レインコートをかっいで、大きな眼玉をニコヤカに出て行った。我々は、その夜、コートのコーヨウを教えられた。

- 坂本さんの巻 オバさん「誰ですか!! トイレに新聞紙をすてるのは……………」
ちゃんとチリ紙があるでしょう!!」「あっ、バレタカ。昨夕、部屋に、チリ紙がなかったんだ!!」

- いろいろな事があった。福島さんや、同期生、下級生と同時代の人々のエピソードには事欠かない。だが、今はもうソーオヤジである。隣の山川さん・古城さんには、大変お世話になった。特に、山川さんのオジさんのご冥福を祈りたい。近藤節さんも年老いた。実に良いオバさんであった。今後も、元気で長生きして貰いたい。せめてオバさんに直接世話を受けた人達だけでも、年に1, 2回位寸志の結集が出来ないものであろうか。

ハウスはなくなった。やがて、あの跡は分譲住宅となり、昔の～18年間の～歴史は、忘れ去られるであろう。

ハウスはなくなった。然し、クラブは、力強く生きている。伝統を守り、大きく築きあげたい。

我々がクラブハウス。

du bist immer bei mir sein !!

(「ATHLETIK FREUND 1972」より転記)

クラブハウス雑想

榎 本 淑 男

(昭和35年卒)

1年上の相馬先輩と私は、当時迄では初めての2世部員だった。そしてオヤジ達から聞いていた創部期の高邁なイメージと、クラブハウスの現実はずしもマッチするものではなかったが、充分楽しかった。今となっては断片的メモリーの集積だが、「雑想」ならず「雑草」を畳の隙間で栽培していたり、破れ障子から外は庭とばかり廊下をニワトリが闊歩していたり、掛蒲団の上に霜が降ったとか、バイトの家庭教師で通って来る子供に体操しか教えてないらしい先輩とか、大食漢対策でバター迄切り刻んで個数制限していたとか、夜明けになると寝ている同室者の頭をまたいでデモに出掛ける「過激派」とか……思い出は尽きない。

クラブハウスの生活思い出すまま

横 手 英 毅

(昭和37年卒)

クラブハウスは、玄関の側が管理人さんの部屋で次が食堂。そこから直角に東へ伸びて4部屋があった。私は後期の2年間一番奥の部屋で最初は原田君、次は丹羽君と合部屋で過した。4つの部屋には、34年卒の松永さんから40年卒の鶴尾君まで、どんな整理整頓の仕方でも毎日を通していたか今でも鮮やかに思い出します。一番奥の部屋は若干広いので追い出しコンパ等によく使われ、当時財界一流の水上先輩等をお迎えしビール等の差し入れと共に貴重なお話を伺ったものだが、その当時それ程有り難みを感じなかったのは若気の至りとは言え恥かしい限りである。

都留先生が部長になられた時も、この部屋で「ハーバード大学で長距離ランナーの勝者に与えられるスウェーター」の話をして大感激し毎日練習にだけは打ち込んだものだった。でも練習に打ち込めば打ち込む程勉学の方を留守にする言い訳が出来て卒業の頃は本当に不安だったが、何とか留年せずに社会人になった。

岡山県の片田舎から恰好良い表現をすれば笈を負って郷関を出てきたのだが、「勉学に運動に恋愛に」がいつの間にか特に後期はゼミと好きな科目だけの出席になり殆んど毎日、ハウスとグラウンドだけの往復に終始した。

管理人さんには、小谷さん姉妹と磯部さんの両親家族の方々にお世話になったが、よく言われたものだ。「学生さんは良いわね!! 今が花よね!!」実際その言葉通り、社会へ出てからもう一度クラブハウスの生活をしてみたいという痛切な思いが時々甦えて来たものです。

私は現在国立市の近くの東大和市に住んで居りクラブハウスは自転車の散歩の範囲内にある。時折クラブハウス跡を訪れるがすっかり様変わりして、立派な家が立ち並んでいる。

静かに40年近く昔を偲びながらあんなに楽しい学生生活をさせて戴いた諸先輩の方々に「本当に本当に有難う御座居ました」とつぶやきながら通り過ぎた次第です。

クラブハウスの集団下痢騒動

天 野 智 臣

(昭和39年卒)

発生したのは昭和36年秋のことと思う。

天野の田舎から、クラブハウスに梨が送られて来た折に、何か生物との喰い合せが悪かったらしく、(1人を除き)住人全員がお腹をこわし、トイレ待ちが起った。

しかし、人一倍食べたはずの鶴尾君だけは平然としていた。その驚靱な胃袋に感服した先輩は、彼に「ゴキちゃん」という敬称を贈った。

青春の思い出

松 本 正 義

(昭和42年卒)

昭和38年の三商大戦も一橋の勝利に終わり、陸上競技のおもしろさに魅せられたその年の秋、小平の下宿先から合宿所に移りました。淡路島出身の田舎者にとっては生まれて初めての東京生活であり、まして今まで経験もない陸上競技の合宿生活は、不安と期待の入り混じった気持ちでした。

合宿生活が始まると24時間同じ屋根の下で同じ釜の飯を喰い、先輩同輩後輩が少なくとも1つの目的を共有し、日夜切磋琢磨を重ね、1つひとつの目標を達成せんとする意思と意気込みが満ちあふれる共同生活に、「これぞ青春」の感を強めていきました。一橋特有のリベラルな雰囲気はここにもあり、自由闊達な個性がぶつかり合い、先輩も含めたある種の友情が形成されておりました。

昭和41年の東大戦を僅差で破り、卒論のまとめもあり再び下宿生活に戻る訳ですが、丸3年間の合宿生活で親しくして頂いた面々と、展開された様々なイベントが走馬灯の如く思い出され限られた紙面では書き尽くせません。対抗試合のあと、大広間での大騒ぎコンペ、翌朝近所への謝罪。不思議と幸運に恵まれ、私の在学中、対抗戦は東大戦を除き連戦連勝でした。

早朝トレーニングのあと朝食に丼2杯腹にいれ、国立小平を毎朝自転車登校。強靱な足腰が育成されました。ただ週2回のメンチカットは全員馴染めませんでした。厳冬の火の気のない生活。静かな夜の勉強。信じられないかもしれませんが、「優」の数を競い合ったものです。穏やかな春の廊下での読書。どなたかは春風を背にバイオリンを弾いていました。「富士見湯」の帰りよく立ち寄ったホルモン焼「繁ちゃん」。誰だったかラーメン鉢満々2杯の酒を一気に飲み干してケロリとしていました。悪戯が過ぎて寮母、近藤節さんにはほうきで合宿所中を追いかけても彼女には全員感謝の念を持っていました。

国立合宿所の貴重な経験は人生の宝物であり、知らず知らずのうちにその後の私の思考体系と行動体系の大きな部分を形成したものといたします。最後になりましたが、この合宿所を設立し後輩の育成に尽力頂いた偉大なる諸先輩と当時の尊敬すべき部長、都留重人先生に心から感謝の意を表します。

ハウス生活の思い出

浜 田 愼

(昭和46年卒)

秋にグラウンドに行った時、クラブハウスが解体されるという事を聞いて、何か思い出の一つが消えていくような気がした。恐らくこの事はクラブハウス生活を体験した人なら誰でもが持つ気持だろうと思う。将来新しいクラブハウスができるだろうし、設備も立派で近代的なものができであろう。クラブのためにも、後輩諸君のためにも、それはそれでいいのである。僕は何も今のクラブハウスを解体する事に反対している訳ではない。生まれた家を訪れるとそこの壁の落書、柱のきず、草木は幼い頃の自分を鮮明に思い出させる魔力をもっている。僕にとってはクラブハウスとはそのような価値をもつ存在になるであろうと思われた。僕にとって学生生活とは即陸上部の生活であり、陸上部の生活は即クラブハウス生活につながるものであった。大部屋の天井の雨もりのあと、障子の破れ目、夜中に音もなく倒れてくるフスマ等グラウンドとハウスに対するなつかしさは同じ比重をもっている。僕がクラブハウスに入居したのは1年の三商大の2～3日後だった。

家庭的な暖かさに強くひかれたのがその動機である。当時はおそらくハウス史上で一番華やかでにぎやかな時であったろうと思う。(もっとも浅井先輩がよく言っていたように、毎晩1000円札1枚握って立川へ遊びに行ったというような良き時代は終わっていた。)当時、おぼさんの他、1号室に僕と堀さん(当時2年、現日産自動車)、2号室に浅井さん(2年、東洋ベア)、3号室に藤田さん(3年、第一勧銀)吉村さん(2年、新日鉄)、4号室に吉田さん(4年、山陽国策パルプ)美和さん(2年、日本郵船)、5号室に織田さん(4年、明治乳業)、大部屋に松本さん(4年、住友電工)、笠原さん(2年、第一生命)、総勢11名のにぎやかさであった。吉村さんと美和さんは僕とほとんど同時に入居したがそれ以来、美和さんのあの豪快な笑声(もっとも人はバカ笑いと称した。)と吉村さんのコンコルドなみの騒音は10数m先の路地からでもそれとわかるほどであって食事時などは寄席をひっくりかえたようなにぎやかさであった。当時は食事時間と、ギャグを連発するテレビの低俗番組がよくかちあい練習時の厳しい顔つきと同じ人物かと思うほどのレベルダウンを示した。(特に名前をかくす)まわりの家か

ら苦情が出たり、いやな顔をされないのが不思議なくらいであった。同室の堀さんは寝る時、例の調子で「俺、この間よー、あの娘とよー……………最高だったよな」という類の話をするのが常で、それを子守歌にして眠ったものだった。ハウスの冬の寒さがまたものすごいものであり、ありったけのものを着こんだ我々の集まる所は自然とこたつのまわりであった。そういう状態で始まらざるを得ないのが麻雀で最初は絶対覚えまいと固い？決意をもって入居した僕も結局1年生の部員の中で最初に覚えてしまった。一番寒い1月から2月にかけて試験があるが、その頃はまた麻雀の最盛期でもあった。最も今の現役連中とちがいのレベルは低く勝つのはいつも吉村さんあたりに決まっていた。別段金をかける訳でもなかったしせいぜい牛乳1本かラーメン1杯程度であり、それも踏み倒すのが常であった。もしまともに払っていたら吉村さんなんかは1日に4～5杯ラーメンを食べないと追いつかないのではなかったかと思われる。逆に僕などいつも負ける上に、先輩連中にいつもおごってもらっていたので、その癖が今だに抜けず、麻雀の腕はさっぱり上達しない。2年生になると同級の及川君、鈴木君、橋本君、岩瀬君が相ついで入居して我々はハウスのレベル維持の新興勢力となった。1年の時に全く授業に出なかった僕が、2年になって多少とも小平に通ったのは、朝及川君がむりやり僕を連れていったからであり、その意味で彼は悪友であったし、反面試験の時はまさに神様のような存在であった。橋本君は前期で同じクラスであったにもかかわらず、不思議な事に教室であまり顔を合わせた事がなかった。ハウスで生活を共にした人達は心の通いあう共通点を持っている事で学生の区別を感じる事がなく、ハウスを通じてのきづなは何年たっても変わる事がないと思う。僕は当時のハウス生活が寮の理想像だと言っている訳でもないし、将来のハウスがそのようにあるべきだと思っている訳でもない。ただ今思い出しても非常に思い出の多い生活であったという事である。陸上の練習の苦しさは年と共に忘れるであろう。又勝敗の感激も薄れると思うがハウスの食堂や大部屋でバカ笑いだした楽しさは永遠に忘れないだろうし、また忘れたくないものである。

(「ATHLETIK FREUND 1972」より転記)

クラブハウスの思い出

柴 沼 和 広

(昭和48年卒)

ハウスの貴重な最後の住人が僕である。おばさんも他の誰もいない明かりの消えたグランとしたハウスの一室でこの3年半のハウスの生活を思い返してみる。コンパでグデングデンに酔って介抱されたこと、先輩同僚後輩と恋愛論から人生論、Y談に至るまで夜が深けるまで話し合ったこと、腎臓病と言われ泣いたこと、朝練をしたこと……。ハウスがなくなったらもうあのようなグランドを離れての人間どうしの触れ合いがなくなってしまう。

共同生活で培われた人間関係の絆は強いと思う。グランドだけでは、なかなか他のパートの人と親しくなれないと感じているのは杞憂であろうか。このオンボロハウスももう最後かと思うと何か熱いものが込み上げてくる。ハウスのおばさんには人一倍手数をかけて本当に申し訳なかった。(おばさんの誕生日は1月7日です)72年に喜寿を迎えられたおばさん、いつまでもお元気で。

(「ATHLETIK FREUND 1972」去り行く者からより転記)

70年史 第1部 写真集より



倶楽部ハウス管理人
近藤節さんを囲んで

[illegible]

郭留生 研

志 孫 卿

